

恥感情の経験頻度とその構造(2)

○生駒 忍

(川村学園女子大学)

キーワード：恥 確認的因子分析 日常経験

The frequency of shame experiences and its structure (2)

Shinobu IKOMA

(Kawamura Gakuen Woman's University)

Key Words: shame, confirmatory factor analysis, everyday experiences

目 的

恥感情は、いくつかの性質の異なる感情に分けることができるとされる。中でも羞恥感と屈辱感とに二分する考え方は広く知られており、日本人においてもこれが当てはまると主張する実証研究がある。

一方で、生駒(2011)は大学生が日常の中で経験する頻度に着目して因子分析を行ったところ、二分説に沿わない結果が得られたと報告した。しかしこの検討は、より日常的に経験されると考えられる羞恥感に相当する項目が3項目と少ないことなど、十分なものであるとはいえない。

そこで本研究では、経験頻度を問う恥感情の項目数をより多くして同様のデータを収集し、羞恥感-屈辱感の二分法が支持されるかどうか、探索的および確認的因子分析を適用して検討を行う。

方 法

調査対象者 大学生144名(男性38名・女性106名;平均年齢19.01歳)が調査に協力した。

質問紙 薊(2008)が恥・罪悪感に関する感情として挙げた項目の中から因子分析で「羞恥感」因子とされた9項目、「屈辱感」因子とされた6項目の計15項目について、日常生活の中で感じる頻度の評定を、1(まったくない)~5(よくある)の5件法で求めた。薊(2008)の項目には現在形のものとして過去形のものとの混在しているが、本研究では生駒(2011)にならひ、表現を変更せずそのまま用いた。

手続き 集団で質問紙を配布し回答を求めた。

結 果

Table 1に、感情毎の経験頻度平均値、因子数を2とした因子分析(最尤法プロマックス回転)および斜交2因子構造の確認的因子分析(後述)の結果を示した。

得られた2因子はそれぞれ、薊(2008)が因子分析およびクラスター分析によって得た「屈辱感」「羞恥感」にはほぼ対応するものであった。不一致点として「恥辱を感じる」が第1因子の側に負荷したことが挙げられるが、内容からみて「屈辱感」に属することはより自然なものであると考えられる。ただし因子間相関も薊(2008)と同程度に強く、因子数を1とした場合でも.334の寄与率が認められたことから、単因子構造の可能性も考えられた。

そこで、続いて確認的因子分析を行った。因子負荷が不明瞭であった3項目を除外し、本研究の「屈辱感」「羞恥感」の斜交2因子による単純構造を検討したところ、適合度指標はGFI = .879, RMSEA = .096, AIC = 172.23となり、一定の適合性があることが確認された。なお、2因子直交モデルではGFI = .846, RMSEA = .123, AIC = 217.98, 1因子モデルではGFI = .783, RMSEA = .141, AIC = 256.17となったことから、斜交2因子構造が適切であることが示唆された。

経験頻度の性差についてt検定を行ったところ、有意差が認められたのは「恥ずかしい」($p = .029$)および「プライドが傷ついた」($p = .003$)で、女性のほうがより高頻度で経験していることが示された。一方、確認的因子分析の因子毎の合計得点では、「屈辱感」「羞恥感」共に性差は認められなかった。

考 察

分析の結果は、日常的な経験頻度からも、恥感情における羞恥感-屈辱感の二分法に適合する知見が得られることを示した。屈辱感と羞恥感とに相当する2因子が得られ、この構造は確認的因子分析からも支持された。同様の項目を用いて特定の一場面で生起する恥感情を検討した薊(2008)と、日常的な経験頻度から検討した本研究とがほぼ同様の構造を見いだしていることから、この二分法の安定性や一般性の高さがうかがえる。両因子とも性差が認められなかった点も、測度の異なる薊(2008)と一致しており、興味深い。

Table 1 本研究の結果(経験頻度平均値の昇順に記載)

	頻度平均	因子1	因子2	CFA
顔が潰れる	1.94	.675	.001	.692
恥辱を感じる	2.32	.715	.043	.716
屈辱感を感じる	2.56	.802	-.148	.715
体面が傷つく	2.58	.562	-.119	.469
プライドが傷ついた	2.74	.595	.042	.644
不名誉である	2.77	.527	.036	.547
自尊心が傷つく	2.81	.662	.044	.692
羞恥心を感じる	2.93	.291	.298	-
恥じ入る	3.01	.323	.309	-
赤っ恥をかく	3.04	.025	.619	.675
恥をかく	3.38	.050	.757	.855
恥を感じた	3.51	.126	.542	.635
恥じらう	3.58	.162	.380	-
気恥ずかしい	3.73	-.227	.740	.527
恥ずかしい	3.84	-.080	.742	.629
寄与率		.219	.181	

引用文献

薊津子(2008). 社心49回大会論文集, 510-511.
生駒 忍(2011). 日心75回大会論文集, 951.